特集

デザインの視点を磨き育てる！

「岩手ADC」とは？

第1回「IADC」コンペティション&アワードの審査後に全員で撮影。

2018年１月、盛岡市内で開催された「岩手ADC（岩手アートディレクターズクラブ）」のコンペティション＆アワード。それは、岩手県内に在住あるいは活動拠点を持つクリエイターの作品を一堂に展示し、その中から優れたアートディレクションを審査するというものでした。東北初の立ち上げとなった地方ADCとは何なのか、審査会が持つ意味は？同クラブの運営事務局に伺いました。

アートディレクターって？

２０１７年に発足した「岩手ADC」。これは、岩手県内に活動拠点を持つプロのクリエイターの団体です。活動内容は、年1回の作品公開審査と授賞式の開催、受賞作品を掲載した年鑑の発行、クリエイター間のネットワーク形成、企業とクリエイターのマッチングやセミナー開催など。現在、約50名が会員登録しています。

その岩手ADCの主たる取り組みがコンペティション&アワードの開催。アートディレクターであるクリエイターの作品を一堂に会し、県外から招いた審査員が公平かつ多角的視点で審査をしていきます。

では、アートディレクターとは何なのでしょう。メディアの多様化に伴って、グラフィックデザイナーをはじめ、コピーライター、カメラマン、映像作家、ウェブデザイナーなど、ジャンルや職種に縛られず活躍するクリエイターが増えつつある時代。アートディレクターとは、特定の専門職を指すのではなく、多様なニーズを総合的にディレクションしていくクリエイターを意味しています。

クリエイター自身が自らを磨く場「ADC」

岩手ADCの発足は、全国の地方で8番目、東北6県で初となります。会長を務める浅沼謙多郎さんは、グラフィックデザイナーとして長くデザインに携わる中で、ある危機感を募らせてきたと話します。

「デザイナーは、キャリアに関わらず時代の眼によって判断される厳しい側面を持っています。だからこそ、常に先を見すえて自分を磨きあげなくてはならないと感じてきました」。

岩手県は、中村誠氏・福田繁雄氏・小島良平氏など著名なグラフィックデザイナーを多数輩出しています。日本グラフィックデザイナー協会（JAGDA）の会員が東北一多く、デザイナーが育つ土壌がある一方で、地元にデザイナーがいることを知らない企業や団体が多いのも現実です。

数年前からデザイナー有志が発起人となって一般の人が地元のデザインと触れ合うイベント「いわてデザインデイ」も開催してきましたが、その意味合いは違うのだと岩手ADC事務局長を務める小笠原一志さんは話します。

「デザインデイは一般向けにデザインを知ってもらう場。ADCは、若い人もベテランも一緒にスキルや感性

「世代に捉われずに新しい自分に挑戦していくことで、時代が迎えてくれるはず。まだまだ引退できません」と浅沼さん

を磨きあげる場。また、審査するという意味では、県内に『岩手広告賞』がありますが、そちらはクライアントに対して与えられる賞であり、ADCとは趣旨や審査基準が違います。ADCは会員の年会費・作品出展者のエントリー料で審査員を招き、自分たちで審査会を開催するクラブ活動。その自主性と当事者意識に意味があると思っています」。

地方ADCの先駆けである富山ADCのはせがわさとしさんの言葉を借りれば、ADCは「年に1回のクリエイターの運動会」であり、同じ場で競争し結果を比較できてこそ上をめざせるとのこと。

「ADCの審査では、一つの作品をどのような姿勢でどのように咀嚼してつくりあげたのか、その仕事が社会とどう関わるのか、デザイナー自身が実際にどう外に対して動いたかという過程までしっかり見られるので、メディアのなかに置かれて評価されるのとは違った厳しさがあり、審査の場はデザイナーとして何とも言えない充実感や幸福感があります」と浅沼さん。

「岩手ADC年鑑2016」

1月27日、第2回コンペティション&アワードが開催され、300点ほどの作品が出展されました。若い世代から受ける刺激も大きい一方、自分たちが次世代を育てるつなぎ役として重要なポジションにいることを、浅沼さんらは感じているそうです。

「こうした場を経て、岩手県の若手デザイナーが国際的賞を獲得したら、岩手全体の注目度も変わっていく」と長期的期待を寄せる小笠原さん

次世代を育て、地域のクリエイティブ力をあげる

クリエイター自身が自己研鑽し、今後ますます重要視されるディレクション力を身につけることで、岩手全体の創造力向上につながる。そうした考えのもと発足した岩手ADC。小笠原さんは数年前から、クリエイターとしてもっと能動的な働きかけが必要だと感じてきたようです。

「何年か前、大阪のクリエイターと話す機会がありました。聞けば、阪神淡路大震災後、クリエイターの仕事が東京に移行したまま戻ってこなかったと。東日本大震災後は、まさに岩手もそういう状況になりつつある。全体的に広告の仕事が減少し、クリエイターの仕事が県外に流出する一方で、若手クリエイターも育たなくなり、岩手の創造力は低下していくことが懸念されます。岩手は一次産業が豊かな生産県。せっかく素材に価値はあるのだから、素材をもっと価値ある形でプロモートしていく地元クリエイターの仕事や存在を知ってもらう事も、地方ADCの大事な役割だと思っています」。

優れたアートディレクションによって企業がいい商品を生み出すことができれば、地域が全体で盛り上がることができます。そこに向け、まずはクリエイター自身の力を底上げしていく取り組み、それこそが岩手ADCの活動なのです。審査会は誰でも見学可能。審査で評価された受賞作品をまとめた年鑑は6月に発行される予定です。「クリエイターと企業は相性も大事ですから、年鑑が各々のデザインの雰囲気を知るヒントにもなるかもしれません」と小笠原さん。

地元のクリエイターが果敢に動き出した今、パートナーである企業や事業所もまた、現状に留まってはいられません。共に挑戦を進め、岩手の持つポテンシャルを押し上げていきましょう。

【岩手ADC】http://iwateadc.net/

「岩手ADC年鑑2016」は、さわや書店フェザン店などで好評発売中です。今年度の年鑑は6月発行予定。運営をサポートする賛助会員も募集中です。（賛助会員募集の詳細は本誌17ページでも掲載しております）

審査会は一般見学可能。企業にとってもプロの作品を見比べ、その評価基準を学ぶ貴重な機会でもあります